



TITLE:

三國の分立と交州の地位

AUTHOR(S):

宮川, 尚志

CITATION:

宮川, 尚志. 三國の分立と交州の地位. 東洋史研究 1942, 7(2-3): 136-149

ISSUE DATE:

1942-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/138834>

RIGHT:

三國の分立と交州の地位

宮 川 尚 志

漢の武帝は元鼎六年（前一一）南越を亡ぼしてその地に南海・蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九眞・日南・珠厓・儋耳の九郡を置いたが、これら諸郡は同年に西南夷の故地に置いた牂柯・越巂・沈黎・汶山・武都、元封二年（前一一〇九）に置いた犍爲・零陵・益州等の郡と共に、漢人の南方進出の有様を物語つてゐる。元封五年（前一一〇六）上記の九郡を統べて交趾部となし刺史を設けた。この中今の海南島におかれた儋耳・珠崖の二郡はその地の夷民の叛亂がたえず、行政により生ずる煩雜がその地の珍産による一部貴人の奢侈的満足を差引いても朝廷にとつて不利をもたらせるといふまじめな官僚の意見により前漢代を終る迄にあひついで併省された。漢人官吏が南方住民に對する貢納の苛酷な要

求から夷漢の反目を生じ叛亂が発生するのはすべての時代を通じ見られる。しかし後漢末になるとこの現象が特に頻繁にかつ著しくなる。それは門閥貴族の官界における勢力進出と關係がある。けだし人材によつてではなく家柄やそれに附隨した情實關係から人事が左右される様になると、「上は權貴を承け下は貨賂を積む」（後漢書六十一賈琮傳）といはれる如く、權力者に依附して立身出世を願ふ官吏が南方の珍奇な産物（その地に産するか又は南洋から運ばれた）を自己の享樂のためでなくとも、上長の好奇的な奢侈欲を充すべき賄賂とするために、住民から誅求する。

靈帝の光和元年（一七八）交趾の賊梁龍の亂あり、南海太守孔芝以下郡縣の官吏もこれに應じ四年に亘つて反抗したが、名將朱雋により平定された、中平元年

(二八四) 交趾の屯兵が貪縦なる刺史や合浦太守を執へ、叛亂をおこした時、新たに刺史に任ぜられた賈琮は、民情を察しその賦斂過重なのが叛亂の原因であることを知り、吏道を刷新し治安を回復するに成功した。しかしこの時すでに綱紀の弛緩は全國的であり、漢室土崩瓦解の兆も普遍的であつた。朱儁・賈琮の如き能吏は南方統治の奏効全からぬ中に中央に召し還され、つゞいて起つた黃巾の大亂の鎮定や亂後の朝政の維持に當らねばならなかつた。南方の紛亂はもはや中央の威令によつて治められず、當地の豪族の實力によつて鎮められねばならなくなつた。獻帝の初年、あひつぎ刺史となつた朱符・張津は共に夷人に殺され、それについで刺史賴恭はもはや漢室の任命ではなく、この地と交通繁き荊州に自立した漢末郡雄の一人である劉表の節度をうけて赴任したのである。そして地方政治の實權は、王莽の亂以來交趾に移住してゐた士氏の一門に握られてゐた。即ち交趾太守士燮と彼自らが表した合浦太守士豐、九真太守士勲、海南太守士武の三弟とである。建安八年(二〇三)士燮は刺史張津と共に交州を建置せんと朝廷に請うてをり、同十五年(二一〇)には

交州治は蒼梧廣信縣から南海番禺縣に移された。後代の廣州は漢代の交州を割いてはじめて設けられたことは注意さるべきである。

漢末の騷亂の中にあつて士燮が少くとも交趾一郡を保全し、中國からの避難者を收容庇護し、劉熙・許靖・許慈・袁徽らの學者を保護優遇し自らも學問にいそしんだことは漢代の文化が一時的にもあれ南方に移植保存されたことを示し、かつ既にこの地に侵入してゐたと思はれる南洋を経由した佛教や、嶺南の山岳を中心にして行はれた神仙思想・道教の如き各種の思潮との交流混淆を結果したと推測することを許さしめる。

しかし武力的に士氏の勢力はそれほど強くならなかつたらしい。士燮は騷亂の間にも漢室への奉使貢獻を絶やさなかつたが、漢末の大亂が漸く小康を獲て、群雄割據の新情勢があらはれ、劉表に代つて孫權の勢力がこの地に延びてくる様になつてから、再びこの地方の物産の豐厚が中原の支配者に注目されはじめ、交土は南海の利を爭ふ諸勢力の角逐の場となる。

二

建安初年以來、交州に雄視した士燮はひたすらその

地方の保全を目的とする退嬰的方針を執つたので、やがて彼よりも強大なる孫權の勢力が伸びてくると、あへて抵抗せず、諸兄弟を率ゐる吳の派遣した交州刺史步騭の節度を承けた。

孫權の勢力が南に伸びる様になつたのは、建安十三年（二〇八）十月の赤壁の戦の結果、北方の強敵曹操の南進が頓挫を來した半面、吳の創業以來の方針であつた揚子江上游進出がこの戦における協力者劉備の荊州四郡即ち、零陵・桂陽・長沙・武陵、今の湖南省の地帯占有のために沮まれるに至つたことによる方向轉換に外ならない。劉備はその後數年荊州の經營に忙しく劉表の舊臣をしきりに登用してゐるが、その中には劉表が任命した交州刺史で、同じく蒼梧太守吳巨に逐はれた零陵の人頼恭の名も見出だされる。步騭は吳巨を討平し、甫めて吳の威を嶺南に布いた。交趾や蒼梧郡が吳の勢力下に入ると、紅河や西江に沿うてこの地と頻繁ではないが交通の行はれてゐた益州郡や牂柯、即ち雲貴の山地に住む種族も吳に歎を通ずる機會を得る様になつた。そしてその媒になつたのは吳に對し新たな忠勤を示してきた士燮である。

一方劉備は早くから謀臣諸葛亮の建言により益州占據の望みを懷いてゐたが、今や揚子江兩岸を併せ有して巴蜀の入口を扼するに至り、當時寛仁ではあるが凡庸なる國主劉璋の統制不十分のために、土着と流寓とから成る蜀の豪族間に門地黨派の争ひが絶えない情勢を察知し、表面上劉璋に招かれた形で、建安十六年（二二二）遂に蜀に入り、彼の爲に北邊を守備する任務に當つたが、十九年（二二四）に至り起兵して劉璋を成都に圍んだ。荊州を守る諸葛亮の軍も來援したので、劉璋は力屈して城門を開き降り、荊州の公安に遷された。劉備の此の舉は孫權をして憤怒せしめ、かつて魏と對抗するため協力した吳蜀二國の關係は一變して荊州分割に關する兩者の武力を背景とした折衝となつた。建安二十四年（二一九）に至り、劉備の將軍關羽が魏國の中心部たる河南地方への進撃を開始するや、吳はひそかに魏と同盟し、揚子江岸に軍隊を出動せしめ關羽の背後をつき、その年十月、彼をして一敗地に塗れしめ、蜀に代つて荊州全土を掌握するのに成功した。公安に退居してゐた劉璋は解放されて孫權から益州牧の官職に復せしめられ、蜀の東部國境の要害白帝

城に程近き稀歸^{ヒキキ}に駐し、來るべき孫權の益州侵入の先鋒を務めんとした。蓋し劉備の益州占據は相當な詭計と武力行使により辛うじて成功したのであり、蜀地の豪族はもとより事大主義をとつて直ちに劉備に服従を誓つたとはいへ、劉備の政權の樞要部に在るは諸葛亮を始め早くから劉備に従つて新たに蜀地に乗り込んだ貴族や將軍たちであり、李嚴等在來の蜀地豪族は副貳的地位にあつたものと思はれる。今や孫權が舊主劉璋を擁立してこの地を窺つた理由は推測に難くない。

曹操の子曹丕が後漢を篡つて魏帝の位に即くや、劉備もまた漢室の正統を紹ぐと稱し帝位を踐み蜀漢を興した。しかも劉備は宿怨ある呉を東征し、かへつて敗北を喫し、白帝城で病歿し、その際諸葛亮及び李嚴に後事を託した。

かうした異變は一時蜀漢國內の動搖を來し、成都西南の漢嘉郡の太守黃元は劉備亡き後、己に好からざる諸葛亮の出兵を疑懼して兵を擧げ幼き太子劉禪（後主）の居る成都を攻めんとした。もつともこの時成都の守將の間では黃元の決心につき諸説があつて、成都が圍めなければ越雋から南中（永昌・益州・牂柯の三郡、即ち

雲南と貴州二省）へ走り、この地の西南夷を從へて據守するであらうといふ者があつたが治中從事の楊洪は、彼が岷江を下つて呉に走り活を求めんとするであらうことを論じ、太子の親兵の出動を乞ひ、諸將をして南安峽口（今の夾江縣附近）を扼せしめ、果して彼を生獲した。

以上岐路に亘つて吳蜀の外交・政治的情勢を述べたが、この黃元の例に徴しても、蜀と吳・南中の關係がよく窺はれると思ふ。しかして黃元の平定するやまもなく蜀漢に對して叛意を明白にするに至つた南夷の有力な酋長雍闓は交州の士燮を通じて呉に款を通じ、越雋及び南中三郡と提携して蜀漢の南方を擾がせた。さきに劉璋を稀歸に駐せしめて蜀を窺はんとした孫權の計畫はまもなく起つた劉璋の病死と、蜀漢の防備周到なりしたために失敗に歸したが、この度は孫權は彼の子劉闓をやはり益州刺史に任じて、これを交益の界に置き、形式上雍闓らに對する指揮權を與へた。

三

四川省の西部から南部にかけて地方は前漢以來、漢族の南方發展に伴ひ、その地の礦物その他天産が着目

され漢人の官に在る者、皆富みて十世に及ぶと稱せられ、稀に清廉な太守があつて、毫毛も犯さず夷越これを歌詠したなどいふ記述があるのは、反つて普通の場合、漢官の誅求が土民の叛亂の種をまいてゐたことを示すものである。要之、これらの事情は交趾部において見られたのと同様と考へてよい。

建安十九年、成都に據つた劉備は鄧方を^{ライコン}庾降都督に任じ南中を治めしめたが、章武元年（二二二）その病歿により李恢が代つて平夷縣（今の雲南省曲靖縣）に治所を置いた。蜀漢の開國以來連續的な征戰は南中の地より多大の官賦を取り立て、また中央の權力がこれまで比較的政權から遠つてゐたこの地の夷民を統制しはじめたことと思はれる。先にあげた雍闓が建寧（雲南）の夷酋孟獲をして南夷を煽動せしめるのに、蜀漢の官賦の不當を以てしたことに關する寓話によつてもその一斑が察せられる。禍機は劉備が白帝城に悲運の最期を遂げた頃に發し、先づ越嵩の夷王高定元が太守龔祿を逐ひ、雍闓もまた益州太守正昂を殺しその後任張裔を擒へて呉に送り、孫權から蜀漢では缺員中であつた所の永昌太守に任ぜられた。この時彼が言つた「張裔府君

は狐羆の如く、外は澤ありと雖も内は實に粗なれば、これを殺すは不可、縛して呉に與へん」との奇怪な表現は南夷の奉ずる鬼教に假りたものと傳へられる。更に牂柯の朱褒も雍闓に應じ、蜀漢の南方は全面的な混亂に陥り、僅かに永昌の守將が蜀漢に忠誠を誓つてゐた。

これよりさき魏の黃初元年（即ち建安二十五年二二〇）孫權は曹丕より吳王に封ぜられ魏の藩屏といふ名目で使持節督交州領荊州牧事の官を授けられた。その翌々年年號を立て黃武といひ、かつ劉備の大軍を擊破するや獨立の氣概を示し魏が人質を求めたのを拒絶したため、その來攻を蒙り、敗戰の結果、謝罪の意を表し、「若し罪除き難く必ず置かれざるに在らば當に土地民人を奉還すべく、乞ふらくは命を交州に寄せ以て餘年を終へん。」と上書してゐる。けだし交州が吳の版圖の中において植民地的存在として扱はれてゐたことが判る。

魏の壓力に對する恐怖のために吳蜀の國交は一應回復を見るに至つたが、劉備の死後、南中の叛亂にあひ諸葛亮はます／＼吳との和平を確める必要を感じ、鄧

芝を呉に遣はし同盟の誼を結ばせたが、實効ある議定は未だとりかはされず儀禮的交權に終つた如くである。しかし蜀漢では南中に對し穩和な方針で臨み、

李嚴は雍閬を曉諭する書を使者に附して招撫せんと試みたが失敗に了つた。つひに建興三年（二二五）の諸葛亮の南征となり、叛亂に加擔した四郡は次々に討平された。この時、門下督馬忠の率ゐる別軍が牂柯一帯を平定し、昆明附近に進出した李恢の軍と呼應し、盤江（西江支流）流域を席捲し、交・益の州境に武威を輝かせたことは注意すべき事件である。呉の益州刺史劉闡は何等なすなくして呉の本地へ歸還し、蜀では占領地域に新しい郡を置き、李恢は交州刺史を領し味縣（曲靖縣）に南中を都督する治所を置いた。李恢が交州刺史を加へられたのを三國志では既に建安十九年鄧方に代つた年につけ、華陽國志ではこの度の南征の結果としてゐる。蜀漢には賴恭・劉巴・許靖を始めかつて交州に在住し、その富源を熟知してゐたと思はれる人々が重要な職に在つたから、劉備の交州に對する欲求は早くから存在したではあらうが、諸葛亮南征の結果はこの欲求を幾分現實的なしえたであらう。南中平定

の結果、金・銀・丹・漆・耕牛・戰馬等を貢納せしめ軍國の用に供したといふがこの中には交州との陸路による交易品が含まれてゐたかも知れない。

雍閬籠絡に失敗した士燮は南中平定の翌年、九十五歳を以て病歿し、孫權はこの機に交州を分ち、合浦以北を廣州となし呂岱を刺史に任じ、交趾郡以南を交州とし戴良を刺史とした。また交趾太守の後任には陳時を派したが、士燮の子士徽は自立して太守を稱し、呉の任じた刺史の赴任を拒否したので戰爭になつたが、呂岱能く計を用ひ士徽一門を滅ぼし、南方における孫氏の威名を確保するのに成功した。やがて廣州は廢止され再び交州に併された。

四

諸葛亮の南征はその宿志たる中原北上の後顧の念を斷つと共に、財政上、軍需上の資源を南方から仰がんと期したものである。出師表に「今南方已に定り、甲兵已に足る」と言ふ通りである。しかし強敵魏と對抗するためには呉の有力なる援助を俟たねばならなかつた。孫權は建興五年の諸葛亮第一次の北伐の際には特にこれを應援しようとする活動を示さなかつたが、諸

葛亮の北伐が失敗に終つた建興六年夏に至り始めて魏軍を安徽省の地に撃破した。亮は呉の戦勝を利用せんとて兩回に亘り更に北伐を行つたが成功を得ず、建興七年（二二九）に至り、吳王孫權は自ら天子を稱し黃龍と改元した。名實ともに三國分立の形勢が成り、蜀漢にとつては名分上呉の僭越を責めんとする議論が盛んであつたが、亮は北伐のため呉の協力の必要愈々大なるを考へ、衛尉陳震を使節とし、孫權の即位を慶賀せしめ、かつ同盟を強化し、魏國討滅を將來に誓つた。盟文の主旨には「若し漢を害するあらば則ち呉これを伐たん。若し呉を害するあらば則ち漢これを伐たん。各々分土を守り、あひ侵犯するなからん。」とあり、即ち攻守同盟及び不可侵協定である。この結果、交州を呉に屬することゝなり名前だけでも交州刺史の官を蜀漢が置くのは呉との國交上面白くないので、同年、李恢の刺史の職を解き、建寧太守に專任した。

元來蜀漢の地益州の領郡は二十餘に上り、丞相亮が益州牧を兼ねてこの全體の行政を統轄してゐた。面積人口富力は他の國の州の一々よりはるかに多きいが、亮はこれを分割するを欲せず、李嚴が巴郡等五郡を以

て江州設置を要請した時にもこれを斥けた。かゝる一元的統制の下に國力を十二分に發揮してこそ中原回復の大事を試ることが出来たのであらう。益州以外に交州や涼州更に冀州の刺史の官が設けられたことがあるが何れも遙領と見なすべきである。たゞし交州の場合、その隣接地域まで蜀漢の版圖に入つてゐたのであるし、かつ國力が許せば蜀漢は或はその方向に開發戰爭を行ひ貿易路を發見しようとしたかも知れない。さすれば李恢が亮征後數年交州刺史たりしは、單なる名前だけでもなかつたかとも思はれる。亮の北伐の先鋒たりし勇將魏延が涼州刺史たりしことについてもこの場合と同様な推測を挟みうるや否や。何れにせよ三國六朝の時代にかけて南海及び西域との交渉は前代にも増して重要な事情にあつたと察せられる。

五

前節において中支那における吳蜀二國の政權確立に伴ひ、交州もその爭霸の的になつたであらうことを推測した。蜀漢の交州進出はその國力上、はた地理的條件のために呉よりも困難であつたが、特に諸葛亮が魏を北伐する政治的必要上、交州の經濟的利益を呉の任

意となすことを以てその軍事的協力を期待しなければならなかつたため、兩者の協定の結果、遂に呉は南方進出の獨占的地位をかちえた。その先驅をなした觀があるのは交州刺史呂岱の南征である。

呂岱は延康元年（二二〇）步騭に代つて交州刺史となり、黃龍三年（二三一）長沙に歸任した。その間、高涼（廣東恩平縣北）・鬱林・桂林の諸夷賊の亂を平定し安南將軍に拜せられ、士徽兄弟を襲殺して番禺侯に封ぜられた。黃武六年頃、交趾既に定つた餘威に乗じその南方の九眞に進討し、更に從事朱應・康泰を遣はし南のかた國化を宣べ、その結果徼外の扶南・林邑・堂明の諸王に暨ぶまで各々使を遣はし奉貢した。

扶南はメーコン河下流域に位し、クメール人の建てた國であるが、赤烏六年（二四三）に至り、その王范旃が使を遣はし樂人及び方物を獻じたと吳志に記されてゐる。これよりさき赤烏二年、交州の蒼梧・鬱林・荊州の零陵・桂陽にかけて、平南將軍と自稱した廖式及びその弟潛の亂があり、呂岱はこの時再び命をうけて交州牧に拜し、唐咨らと諸軍あひつき、賊を攻討し年餘にして定めた。呂岱は孫亮の太平元年（二五六）九十

六歳を以て歿したが、交州における彼の威名は士燮のそれに比すべく、かつその時期よりも漢族の勢力が南進してゐることが知られる。彼は清廉な人格を以て交州に臨み、郷里の妻子に對し金品を仕送りしないこと數年に及んだ。孫權がこれを聞き歎息してその家門の困窮を救ふべく錢米布絹の定額を年々賜つたといふ。けだし南土に臨む地方官として稀にみる適任者であつた。このことは彼に従つて九眞を征討した薛綜が黃龍三年呂岱が一旦長沙に還り後任の交州刺史が銓衡中であつた頃上奏し交州の狀態を報告した記述を參考するとよく理解される。薛綜は士燮の時代に交州に寄寓し劉熙に従つて學んだ人である。彼の上疏の大意を述べると左の如くである。

昔帝舜は南巡して蒼梧に卒し、秦は桂林・南海・象郡を置いた。然らば則ち四國の内屬はよつて來る所がある。趙佗が番禺（廣東）に起り、百越の君を懷服したのは珠官の南である。漢武帝は呂嘉を誅し九郡を開き交趾刺史を設けてこれを鎮監した。山川長遠で習俗齊しからず、言語同異し重譯を以てやつと通ずる、民は禽獸の如く長幼の別もない。椎結徒跣

貫頭左衽がその風俗である。長吏の設はあれどもなきが如くであつた。これより以來、頗る中國の罪人を徙しその間に雜居させ、稍々書を學ばしめ粗々言語を知らしめた。使驛が往來して、禮化を觀見させた。後になつて錫光が交趾太守、任延が九真太守となり、土人に耕犁を教へ、冠履を着用させ、ために媒官を設けたので、始めて聘娶の禮を知つた。學校を建立し導くに經義を以てした。これより已降、二百餘年頗る中國の風に似てきた。臣が昔、始めて交州に客居してから、珠崖では州縣治所における嫁娶を除くと、地方土民は皆八月になると戸を開き、人民集會の時に男女は自ら配偶たるべき者を相して夫妻となり、父母もこの選擇を止めることができない。交趾の麀冷縣、九眞の都龐縣では皆兄死せば弟がその嫂を妻とし世々これを以て俗となし、長吏は恣聽して禁制することができぬ。日南郡では男女は裸體を以て羞としない。かういふ點からいへば蟲豸も面目を靦^はづるありといふべきのみである。

しかして地廣く人衆く、阻險毒害、亂をなし易く治に従はしめ難い。縣官は羈縻の方針を取り令を示

して威服する。田戸の租賦は裁取供辦——民力を量つて取り用度に供し、遠方の珍産を致すを貴ぶ。名珠・香藥・象牙・犀角・瑇瑁・珊瑚・琉璃・鸚鵡・翡翠・孔雀の奇物は寶玩に充備し、必ずしもその賦入を仰いで以て中國を益さうとしない。

然しながら九甸の外にあり、長吏の選、おほむね精覈ならず。漢時法寛くして多く自ら放恣した。故に數々法に反違した。珠崖郡の發された理由は長吏がその土民の好髪をみて髡取して髮としたことである。臣の所見について見ても、南海の黃蓋（赤壁戰の勇將とは別人）が日南太守となつて、車を下つて供設豐かならざる故に主簿をうち殺し、それゆゑに驅逐された。九真太守儋萌は妻の父周京を宴會に招き他に大吏の出席を請ひ、酒酣にして樂を作し、功曹の番歌が起つて舞ひ京にも舞へとすゝめたのに京は起たうとしなかつた。歌はなほしつこく迫つた。萌は忿つて歌を杖つたので郡内に逃れた。歌の弟苗が衆を帥ゐる府を攻め毒矢で萌を射て、萌は物故するに至つた。交趾太守の士燮が兵を遣はし致討したがとう／＼克てなかつた。

又故刺史會稽の朱符は多く郷人虞褒・劉彥之の徒を以て長吏に部署し、百姓を侵虐し、しひて民に黃魚一枚、收稻一斛を納めさせた。百姓怨叛し山賊並び出て州郡を攻突し、符は走つて海に入り流離喪亡した。

次いで南陽の張津が刺史になつたが荊州牧劉表と隙あり、兵弱く敵疆く、歳々に軍を興し諸將厭患し去留自在である。津は檢攝するところ少く威武足らず、陵侮せられ遂に殺没さるゝに至つた。後に零陵の頼恭を得たが、彼は先輩仁謹であるが時事を曉らない。表は又長沙の吳巨をして蒼梧太守とした。巨は武夫輕悍で恭の取る所に服しない。相怨恨し恭を逐出し步騭を求めた。この時、津の故將夷廖・錢博之の徒尙多く、騭は次を以て鉏治し綱紀に定つた。會々仍つて召し出された。

呂岱すでに至り士氏の變あり、越軍南征す。平討の日、長吏を改置し王綱を章明した。威は萬里に加里、大小風を承けた。これに由つてこれを言へば邊を綏んじ諸を撫すのには實に其の人がある。牧伯の任は既に宜しく清能なるべく荒流の表は禍福尤も甚

しい。

今日交州は粗定ると名くと雖も尙、高涼の宿賊あり。其の南海・蒼梧・鬱林・珠官の四郡界は未だ綏からず、依つて寇盜を作し、専ら亡叛遁逃の數となつてゐる。もし岱が復び南せずんば新刺史は宜しく精密に八郡を檢攝し方略智計能く稍々漸を以てし能く高涼を治むる者を得べく、それに威寵を假し、之に形勢を借し、その成效を責むれば補すべきにちかしい。またもし但中人、常法を近守し多數異術なき者ならば則ち群惡日に滋く久遠に害を成す。故に國の安危は任ずる所に在り、察せざるべからず。竊かに朝廷その選を忽輕にするかと懼れゆゑに敢て愚情を竭し以て聖恩を廣め奉る。

六

薛綜の憂へた如く、交州にはその後も叛亂が屢々起つてゐる。しかも大勢において吳の勢力は次第に確保されてきた様である。

赤烏五年には聶友・陸凱の二將は珠崖・儋耳を討ち海南島を吳の實權下に入れた、十一年には交州刺史陸胤は九眞交趾の夷賊を伐ち、噲すに恩信を以てし務め

て招納を崇び、高涼の渠師黃吳の黨三千餘家を降し、山谷の中にひそむ不羈の民をも歸順せしめるに成功した。

交州に來住した吳の士大夫には地方官以外に流謫された政治家や文士も數へられ、交州の文化開發につくしたと思はれる。孫權の怒にふれ交州に流された虞翻は謫地にあつても講學倦まず門徒常に數百人あり、又老子論語國語の訓注をつくり皆世に傳つたといふ。儋耳を伐つた將軍聶友は實に縣吏として虞翻警護の任に當り、その才能を虞翻に認められ豫章太守謝斐へ推薦狀を書いて貰ひ、遂に立身したのである。

その他顧譚、承兄弟（丞相顧雍の子）張休（吳の元勳張昭の子）らも事に坐して交趾に流され、その地で卒したが、顧譚は流徙の中、發憤して新言二十篇を著はした。

交州へ流すことは死刑につぐ重科である。永安元年（二五六）自分が迎立した景帝孫休に誅せられた丞相孫綝が哀みを休に乞ひ叩頭し、「願くは交州に徙らん」といふと、休は「卿は何を以て膝胤・呂據（共に綝に誅せらる）を徙さざりしか」と反問する。綝また「願くは

没せられて官奴とならん」と。休曰く、「何ぞ胤據を以て奴となさざりしや」と。遂にこれを斬つたと記されてゐる。吳末の暴主孫皓が良臣樓玄・朱據を交趾に徙したこともある。

薛綜の奏に見ゆる如き交州の珍産は専ら吳の貴族の奢侈への欲求に應ずるものである。故に吳の宮廷生活が華美になるにつれ、交州の叛亂が起る頻度も増すわけである。

江表傳には孫亮が黃門をして中藏吏に就いて交州獻する所の甘蔗餚を取らしめ、黃門がその中に鼠矢を投じ中藏吏を中傷せんとした不正を看破した逸話を傳へてゐる。吳の士大夫に止らず、魏においても南海の珍産には垂涎した様であり、早く黃龍四年には馬を以て珠璣・翡翠・瑋瑁に替へんと申し込み、孫權が惜し氣もなく交易を許したことがある。

七

景帝の永安五年（二六二）察戰（官名）の鄧荀を派して交趾の孔僞三千頭及び大猪を調した。この前年、交趾太守孫譚は南夷で手工をよくする工人千餘を建業に送つたことがあり、これが大いに土民の恐怖と反抗をか

りたてた。その翌年、魏の咸熙元年（二六四）の八年辛未の詔に、「吳の政刑暴虐、賦斂無極の様を述べ、孫休が鄧荀らを遣使し交趾太守に勅しその民を鎮送し發して以て兵となした」と言つてゐるのはこれと同一事を傳へたもので、上手工となしたといふ記事の方が正しいであらう。交州夷民の反感は元來漢人官吏に向けられるが、この頃吳の官吏の數多く、ことに中央から直接派遣する内使が横暴で、陸凱の奏によると、「其中、一民十吏、何ぞ以て命に堪へん」といふ。果して景帝の末年の交州に對する誅求過多は交趾郡吏呂興の反となつて現れた。（二六三）太守孫譚（華陽國志靖に作る）は夷民の怨府となつてゐたので荀と共に殺された。この年は會々蜀漢の亡びた年で、五月に呂興の叛あり、十月には蜀から求援の使がきた。吳では丁奉以下諸將をして壽春・南郡・沔中に出兵させ魏を牽制し蜀を助けたが、まもなく成都陥り蜀主劉禪は魏に降つた。これを見て吳はもはや蜀を援ける義務なしと考へ兵を還して了つた。時に蜀漢の安南將軍霍弋は南中の事を統督し、成都守らず後主東遷すとの報を得てのち南中保全のため六郡（建寧・興古・雲南・永昌・牂柯及び

南廣）をあげて魏の晋王司馬昭に内附し、南中都督の官を授けられ、長吏を專任する權を與へられた。呂興は霍弋を通じて魏に使を派し、交趾太守及び援兵を請うた。魏では呂興を懷柔し吳の背面をつかんとし、霍弋は自己の權限を以て建寧の南夷一流の名門の出身である爨谷を遣はし交太守趾とした。（二六四）その麾下には同じく南夷の土豪・董元・毛晃・孟幹・孟通・爨熊・李松・王素らが夫々の部曲を領して從軍した。

呂興は一時、交趾の民心を煽動し、巴蜀を平定したばかりの魏軍に呼應し、九眞・日南二郡に對し武力と外交手段をつくしてこれを服屬せしめ、交州一帯の諸將吏や夷民の旗頭になつた。魏では呂興の功を嘉し督交趾諸軍事上大將軍定安縣侯（華陽國志はたゞ安南將軍）に拜したが、同年九月辛未の詔により更に使持節都督交州諸軍事南中大將軍に進めんとしたが、策命いまだ至らず、呂興はその功曹李統に殺さるゝに至つた。

この年吳では孫休歿し、烏程侯孫皓位につき、蜀漢の滅亡と交趾の離反とにより國內動搖し再び交州を分ち廣州を置いた。魏の遣はした太守爨谷は吳の元興二年（二六五）任地に至り、呂興亡き後の事態を收拾した

が、まもなく卒した。この年八月、晋王司馬昭死しその子炎が嗣ぎ、十二月に至り、魏をうばつて晋を興した。即ち西晋の武帝である。北方の勢力は俄かに呉に加はり、孫皓はこの少し前に、都を建業から武昌に遷し對抗の態度をとつた。また武昌は交州との距離が建業よりも近いから、この遷都は一面交州よりする晋の攻勢に備へんとするにも便利である。

晋は馬融（忠の子）ついで犍爲の楊稷を後任の交趾太守に任じ稷を綏遠將軍にその麾下の南夷の將領にも夫々將軍の號を與へ吳の來攻に備へた。

寶鼎三年（二六八）吳の交州刺史劉俊、前部督修則は晋の交州刺史となつてゐた楊稷を討つて失敗し、鬱林を失ひ、更に毛旻・董元の攻撃を受けて合浦の古城に敗死した。楊稷は毛旻を鬱林、董元後に王素を九眞の太守に任じ、益々交州諸郡を侵した。孟・董等の南夷はかつて諸葛亮が南中を征した時、蜀漢の官職を與へて懷柔したところであり、霍弋はこの時既に歿つてゐたが、彼の宜しきを得た統御は漢人に對してかゝる犬馬の勞に服せしめるを得たのである。

その翌年建衡元年（二六九）吳では更に虞汜（翻の子）

薛珣（綜の子）陶璜（基の子）をして荊州より陸路南下せしめ、李勗・徐存をして福建省の建安より海道により西下し、合浦に合體し、交趾を討たしめた。建安の海道は風波あれて通ぜず、翌年二將は導將を枉殺しほしまゝに軍を還したので、罪あらはれ伏誅した。しかし荊州より南下した前部督陶璜の軍はその翌年、扶嚴の惡夷梁奇の統べる萬餘の軍を併せて、晉將毛旻・孟岳らと封溪に戦ひ大勝し、交趾城を圍み、つひにこれを陥れ、楊稷以下を捕へた。この戦勝は主として陶璜の功勞で、彼は首將滕脩に勧め、交趾以南の餘賊に鹽を供給する途を斷ち、又鐵の兵器を悉く耕作具に改造させ、遂に交州一帯の治安を全うすることを得た。孟幹らは秣陵に送られ、一旦死を免され、蜀の側竹弓弩を作る弓工に使役された。孟幹はその後、逃走して晋の洛陽に達し、楊稷ら奮戦の實情を報告した。華陽國志卷四にはこの間の事實を傳へること甚だ詳しい。南夷出身の諸將の義理固さと勇猛敢爲の面目を遺憾なく記してゐる。魏晉時代に支那本土に入つて活躍を演じた周邊民族の中には、北方の五胡のみでなく西南方の民族もあることを忘れてはならぬ。南夷はかつて諸葛

亮の北伐に従軍し、良將王平のひきゐる五部の兵員として魏軍の精銳と祁山に對峙して譲らず、また彼等と同族の住む交州の富力を侵蝕せんとした吳人の來攻に死力をつくして抗戦したのである。

孫皓に交州に新昌・武平・九徳の三郡を置き、陶璜ついで修允（則の子）をしてこの地の經營に當らせ、九眞以南に吳の威は及んだ。

天紀三年（二七九）合浦太守修允の部曲督郭馬らの反があつた。その原因は修允が廣州に轉任後死去したのでその兵を諸將に分給せんとしたが、南夷の兵士は強固な團結の下にあつた累世の舊軍で離別を樂はず、吳の軍制により改編されるのに反對したのである。郭馬は都督交廣諸軍事を自稱し諸將を南海・蒼梧・始興に

分派し、廣州刺史を逐つた。吳は東西兩道よりこれを討つた。その年冬、すでに西晋の軍は諸道より大舉南下し、武昌も危くなつた。南征軍の將陶潛は故に武昌に留り形勢を觀望した。西晋の軍は翌年各地に大勝を博し、吳の丞相張悌も戰死する有様で、陶潛は遂に建業（寶鼎元年遷都）を守るべく兵をかへした。かくて吳は交州の叛を平げる能はざる中に亡んだのである。

三國分立の時代、それ自體に富源を有し、かつ南洋方面との貿易の門戸である交州（及び廣州）が列國爭覇の間にいかなる地位を占めたかを略述した。晋南朝における南海との交渉はこの繼續であるが、これについては稿を改めようと思ふ。